

両家墓にもアイデアあり

第13回では北海道深川市の山形 候一さん(当時58歳)が両家墓で入賞した。

このお墓は、南家と山形家の両家墓です。今日あるのも育ててくれた義父母のおかげです。育ててくれたお礼と感謝を込めて、山形家の墓石(自分たちの寿陵墓)の横に、一緒に建てました。3本が並んで立った御柱は、山形家、南家そして両家の先祖たちが、自然体であることを意味しています。素材の石も、より自然っぽい六方石を使用しています。

お墓に刻みこまれた文字群は、数千年の間、脈々と普遍的に変わらず生き伝えられてきた「老子」たちの教えを刻んでいます。近年、「生」とか「命」というものが、軽んじられてきている世の中であるからこそ、その思想を文字に選び、「人間としての生き方、あるべき姿」、その本質を言葉の中に見出し、家族がお墓に参る事、その言葉を見つめる事で、「家族の愛」「心の豊かさ」を養ってほしいと願っています。

第16回には北海道滝川市の岩上 進さん(当時58歳)が、自分の家のお墓と、妻の実家の墓をリフォームで同じ墓所に建立して入賞した。

生前、義父がお墓の修理のことを気にしており、その意思を受け継ぎお墓のリフォームを思い立ちました。当初、妻の実家のお墓ということもありお墓を滝川の同じ敷地内に移すことはできないかと考えておりました。そこで石材店さんにお伺いしたところ、既存のお墓をそのまま移設するという以外にも、モダンデザインのお墓にリフォームできるというアドバイスから驚きと共に、私どものお墓への考えが明るく前向きになりました。しかも、実際提案していただいた図面や石の色づかいがとてもすばらしく、驚嘆に値するものでした。しかし一方では、こうしたお墓を見たこと



がなかったもので、この時はまだ出来上がりに不安と期待が交差しておりました。

しかし、こうした不安も完成したこのお墓を見た瞬間、すべて感動に変わりました。悼石（墓碑）は両家ともこれまで受け継いだお墓をリフォームしました。岩上家の墓石は磨きを行い、妻の実家のお墓は大きかったので岩上家に合わせ少しカットし磨いてあります。また、通路敷石にも古い墓地の石材を活用しています。私共の父や母が当時、思いを込めて建てたお墓を、リフォームというカタチで継承できたことは何よりの喜びです。両家のお墓をひとつ屋根の下ならぬ、ひとつ墓所の元でリフォームすることが出来、それを受け継いで行ってくれる子供達にとっても、喜んでもらえる意味のあるものになったのではないかと感じております。

同じく第16回に熊本県熊本市の本田・木付（きつき）隆子さん（当時59歳）が両家墓で入賞した。婚家の墓と実家の墓を仲良く並べて建立したそうだ。

子孫や孫がいつでもお参りが出来、私も将来父母や夫と共にこの墓に眠りたいと私の実家の墓地に、実家と私の家の墓と一緒に連立させて頂きました。亡き主人も私の父母やご先祖様の隣で、元気だったころのようにお酒を酌み交わし、私達の事を見守っているような気がします。

シンプルなデザインで掃除のし易さ又墓前を広くして頂き春や秋の彼岸、命日には皆でお参りの出来る出会いの場所になれると思っています。



第21回には、自分のお墓に加えて、義理の両親のための小さな2人だけのお墓を建立した大分県速見郡の吉田 修一さん（当時46歳）が入賞した。父が急死したことを期に、遺骨をどうするかという問題が突然訪れました。私の父は末っ子のため、先祖代々のお墓には入れず、また出来れば自分のお墓を持つことを希望していました。しかし、生前には、なかなか決心が付かなかったことと、立地条件の良い墓地が決まらず、生前にお墓を立てる



ことなく昨年亡くなってしまいました。

残された家族で、お墓を作るべきか、それとも今後のことを考えて（私には現在17歳の息子と娘の双子は居ますが、大分の地に残るとは限らない）、納骨堂や樹木葬といった最近のスタイルで納骨を行うべきかずいぶん悩みました。

また、お墓を作るにあたり、「お墓を作った人の思い」や「全優石のホームページ」等を参考にさせてもらい「お墓を建てることへの意味」を考えさせられました。

さらに、私は「一人っ子の一人娘」を嫁にもらっているため、義理の両親の問題も考えなければならない立場でした。そのため、義理の両親は、私の父の死を期に私には面倒を掛けないように、自分たち2人は、「散骨や樹木葬で良いよ」と言って下さっていましたが、「私たちがこうして毎日暮らしていけるのも両親のおかげ」と思ったのと、「これも何かの縁」を感じ、義理の両親が健在のうちに、「思いきって」両方同時にお墓（義理の両親は2人だけが入る小さなかawaiiお墓）を作ることに決めました。

第22回では再婚した2つの家族が一緒になった象徴としての2家名入りお墓を建立した山梨県北杜市の平田 馨さん（当時86歳）が入賞した。末永い「和」の想いを二つの石の重なりにこめて。テレビ局のプロデューサーとして働いていた頃、番組制作の仕事で偶然、自らの家系について知ることとなりました。私の先祖は桃山時代を起源とする刀剣金具師で、徳川幕府のお抱え工として、また維新後は世界的に評価の高い七宝技術を取り入れた勲章を作るという、格の高い職人家系だったのです。西洋好きでハイカラだった英語教師の両親からは、先祖の功績について教わることはありませんでしたが、文献で自らのルーツを知り、非常に誇らしく思いました。と同時に、その末裔として先祖の慰霊をきちんとしておかなくては、という思いが強くなっていきました。



妻に先立たれた私でしたが、縁あって小淵沢で再婚。暖かい家族に迎えられ、第二の人生をスタートすることができました。心やさしい新しい家族に私の心は決まりました。東京にあった墓を八ヶ岳、南アルプスが望める風光明美な小淵沢へ移そうと。このお墓を2つの家族が一緒になった象徴として建てようと

思ったのです。新しい息子夫婦や孫たち、みんなが賛成してくれて、妻の前のご主人と早世した息子の子どものお骨もこのお墓に移すことになりました。息子も「娘たちに手を合わせるといふ気持ちを伝えることができ、ありがたく思っています」と言ってくれました。

正面には大きな「和」の一文字が力強く刻まれています。この「和」の字は息子が渾身の想いで書いてくれました。そのわきの自然供養塔は東京の墓から移設したもの。そして反対のわきには我が家の歴史を記した顕彰碑を建てました。

家族みんなが心安らかになれる場所。二つの石の重なりは、過去と未来のつながりの象徴であり、二つの家系の融合のしるしでもあります。「和」の心をもって強いきずながこれからも末永く続いていくことを願ったお墓ができて、本当にうれしく思っています。